



神奈川県
環境科学センター

平成 30 年版 (2018)

神奈川県環境科学センター

年

報

第 50 号

平成 30 年 11 月

巻頭言

年報の発行に寄せて

～マイクロプラスチック問題を考える～

所長 こばやし 小林 ゆきふみ 幸文

都市部に散乱しているプラスチック片の行く末に、皆さんは思いを馳せたことがありますか。まだ、この分野の研究は始まったばかりですが、ひとたび大雨が降ると、道路側溝から河川を経て、海に至ることがわかってきています。

プラスチックは軽量で、加工・成形しやすいことから、その用途は、日常生活で身近に使われる容器包装、日用品・雑貨、玩具から、住宅の建築資材、自動車や家庭電化製品の部品に至るまで多岐にわたっています。プラスチックが、現在の豊かで快適な生活を支えていることは言うまでもありません。世界的にみても、プラスチックの利用は拡大しており、日本プラスチック工業連盟の資料によれば、2015年には世界で約2億6,900万トンが生産されています。

しかしながら、一方で、環境中に排出されるプラスチックの量も増大し、世界で海洋に流出するプラスチックは、少なくとも年間800万トンに達するともいわれています。プラスチックの性質上なかなか自然に戻らないことから、すでに5兆個ものマイクロプラスチックが海洋に浮遊しているとされています。

このような事態を踏まえ、当所では、主に相模湾沿岸に漂着するマイクロプラスチックに着目し、昨年度から実態調査に着手しました。これまでの調査結果から、①漂着しているマイクロプラスチックの量や材質は海岸によって特色（違い）があること、②未だに工業原料のペレットが漂着して海岸があることなどが判明しました。このことから、相模湾沿岸のマイクロプラスチックは、外洋から流れつくものよりも、内陸から近傍の河川を通じて運ばれるものの方が多いのではないかと推測しています。

マイクロプラスチックの起源は、使い捨て製品だけでなく、屋外で使用されている様々なプラスチック製品（例えばカラーコーン、人工芝、ポリバケツ、洗濯バサミ等）が劣化・破損したものも含まれると考えられることから、当所では、本年度から河川の実態調査にも着手したところです。

本県では「SDGs 未来都市」の具体的な取組として、本年8月鎌倉市由比ガ浜の海岸に打ち上げられたクジラの胃からプラスチック片が見つかったことを受け、9月に「かながわプラごみゼロ宣言」を行ったところです。このなかで、これまで実態調査を進めてきたマイクロプラスチック問題も重要な課題の一つとなっています。

マイクロプラスチック問題への取組として、既に海洋を漂流し、あるいは海岸に漂着しているマイクロプラスチックを回収することは極めて難しいことから、そもそもプラスチックを環境中に流出させないことが重要です。当所としては、多くの皆さまに、海岸などでの実態を知っていただき、プラスチックの発生抑制、循環的な利用の促進や、ポイ捨て禁止など適正処理の徹底に結び付けていきたいと考えています。

また、この問題は、SDGsの17分野の目標において、「14 海の豊かさを守ろう」にとどまらず、「12 つくる責任、つかう責任」にも深く関係しています。当所業務のもう一つの柱である環境学習において、持続可能な社会の実現という観点から、プラスチックで成り立つ現代社会は今後どうあるべきなのか、というテーマとしても取り上げていきたいと考えています。

目 次

1	沿 革	1
2	運営概要	2
2. 1	所在地	2
2. 2	敷地及び建物	2
2. 3	環境学習施設	2
2. 4	環境常時監視施設	2
2. 5	主要検査・研究機器	2
2. 6	組織及び業務内容	3
2. 7	職員配置数	3
2. 8	予算執行状況	4
2. 8. 1	平成 29 年度歳入歳出決算額	4
2. 8. 2	年度別歳出決算額	4
2. 9	環境安全管理協議会	5
3	事業概要	6
3. 1	環境情報部環境活動推進課	6
3. 1. 1	企画調整業務	6
3. 1. 2	環境学習業務	17
3. 2	環境情報部環境監視情報課	20
3. 2. 1	環境監視業務	20
3. 2. 2	環境情報の管理・提供業務	25
3. 2. 3	行政関連の調査等の業務	26
3. 2. 4	その他業務	27
3. 3	調査研究部	29
3. 3. 1	調査研究業務	29
3. 3. 2	環境監視業務	34
3. 3. 3	行政関連の調査等の業務	35